

【論文】

青年期用ハーディネス尺度

(Personality Hardiness Inventory for Adolescence : PHIA) の作成

森 真衣子\* 東條 光彦\*\* 佐々木 和義\*\*\*

\*兵庫教育大学大学院学校教育研究科 \*\*岡山大学大学院教育学研究科

\*\*\*兵庫教育大学学校教育学部附属発達心理臨床センター

本研究の目的は、青年を対象に、Kobasa (1979a) の定義にもとづいた青年期用ハーディネス尺度の作成を行うことであった。大学生 554 名 (男性 202 名, 女性 349 名, 不明 3 名) を対象に、データの収集を行ったところ、3 因子 27 項目からなる青年期用ハーディネス尺度 (Personality Hardiness Inventory for Adolescence: PHIA-27) が構成され、信頼性と妥当性が確認された。さらに本尺度の簡易化を試行したところ、同様の因子構造を有する PHIA-15 を確認することができた。PHIA-27, 同 15 とともに、抽出された 3 因子は、いずれも従来のハーディネス概念に対応したコミットメント, チャレンジ, コントロールの要素を包含していた。

キーワード: ハーディネス (Personality hardiness), 青年期, アセスメント

【問題と目的】

Kobasa (1979a) は能動的な人間観を持つ理論体系のひとつである実存心理学の視点から、ハーディネス (hardiness) という性格特性を提唱した。それによれば、先行する要因と健康とを媒介する耐性という人格構成要素の存在を想定し、その媒介過程が日常ストレスが疾患を引き起こす過程への影響を調整するものとして捉えられている。Personality hardiness は、人生の様々な状況に自分を十分関与させる傾向、すなわち熱心であること (commitment), 安定性よりもむしろ変化が人生の標準であり成長の機会であると捉える傾向、すなわち種々の事態を脅威というよりもむしろ挑戦対象として評価する傾向である (challenge), 個人が出来事の推移に対してある一定の範囲内で影響を及ぼすことができると信じ、かつそのように行動する傾向、すなわち自分の運命は自分で制御できるという感覚を持っていること (control) の 3 つの構成要素によって成り立っており、これらの特性がともに頑強であると特徴づけられた個人

の方が、ストレスの影響によって疾患にかかることが少ないと指摘されている (Kobasa, 1979b)。

ところで、ハーディネスを評価するにあたっては、Kobasa (1979b) の 50 項目版ハーディネス尺度を基本とするのが妥当との指摘がある (小坂, 1992)。しかしながら、一方で邦訳された日本語版ハーディネス尺度は、小坂と吉田 (1992) において、いずれの因子の特性をも反映していない項目が 10 項目も存在したことから、小坂ら (1992) は『ハーディネスを高い信頼性と妥当性をもって測定できる尺度を開発する必要がある』とも指摘している。さらにこの 50 項目版ハーディネス尺度について、ひとつの性格特性の測定にしては 50 項目版は項目数が多すぎることも指摘されていることから、桜井 (1995) は高校生用ハーディネス尺度 15 項目を開発、田中ら (1998) は大学生用ハーディネス尺度 18 項目を開発するにいたっている。これに対し多田と濱野 (2001) は、これらの高校生用・大学生用尺度は、小坂と吉田 (1992) の邦訳した 50 項目版の項目内容と比較して理解

しやすい項目内容であるとしながらも、チャレンジの因子における内的整合性の低さを問題としており、小坂 (1992) もまた、Kobasa (1979b) がハーディネス尺度を作成したときにコミットメント、コントロール、チャレンジの反対の概念がそれぞれ、疎外、無気力、保障であるという二分法を採用していた点に異論をとなえている。

このように概観すると、従来開発されている日本語版のハーディネス尺度は因子構造が不安定であり、とくにチャレンジの内的整合性が低いことや尺度構成が二分法を採用しているという問題があり、それらを改善すべく開発された多田ら (2001) の尺度もまた対象がすべて女性に限られており、サンプルが少ないことから項目に偏りがあると云わざるを得ない。

そこで本研究では Kobasa (1979a) の定義にもとづき、青年を対象にハーディネスに関する調査を行い、ハーディネスのアセスメントツールを作成するとともに、それをを用いてより簡便なハーディネス尺度を構成し、その信頼性・妥当性の検討を行うことを目的とする。

## 【方法】

### ①予備調査

調査対象は大学生 (89 名) で、講義の時間を利用して一斉に行われた。

### ②本調査

調査対象は大学生 (1 年生から 4 年生) 554 名 (男性 202 名、女性 349 名、不明 3 名) で、講義時間を利用して一斉に行われた。

### ③心理学的測定

#### ■ ハーディネス尺度

Kobasa (1979b) によって作成された 50 項目版ハーディネス尺度を小坂・吉田 (1992) が邦訳した日本語版 PVS、および桜井 (1996) によって作成された高校生用ハーディネス尺度を参考に予備調査用紙を作成し、応答を集計した結果から新たに作成したハーディネス尺度 (予備調査用) を使

用した。応答は、その特性について「あてはまる～あてはまらない」の 4 件法で行われた。

#### ■ 自尊心尺度

外的基準として、ローゼンバーグにより作成された自尊感情尺度の 10 項目の山本ら (1982) による邦訳版を使用した。

## 【結果】

### 1. ハーディネス尺度 (予備調査用) の因子構造について

ハーディネス尺度 (予備調査用) 60 項目について、G-P 分析を行った。その結果から 1 項目を削除したのち、I-T 相関分析により不適切な 10 項目を削除した。

上の操作から残った 49 項目のハーディネス尺度 (予備調査用) について、主因子法により因子を抽出後、斜交回転を施した。2 因子・3 因子・4 因子で探索的因子分析を行ったが因子の固有値の推移とスクリー基準、解釈のしやすさという観点から 3 因子構造と判断するのが適切であると考えられた。その結果いずれの因子にも負荷していなかった 22 項目を削除し、ハーディネス尺度 (予備調査用) は第 1 因子 14 項目、第 2 因子 8 項目、第 3 因子 5 項目により構成されている (計 27 項目) と解釈された。

抽出された 27 項目について、再度同様の因子分析を行った結果 (表 1)、第 1 因子には『自分に対して肯定的であり、人生に対して積極的で充実感を感じている』、第 2 因子には『日常生活好奇心を持ち、刺激を求め何事にも挑戦していく姿勢がある』、第 3 因子には『予期せぬ変化に対しておそれず対応が出来ると感じる』という特徴が認められた。このことから、それぞれの因子は「コミットメント」「コントロール」「チャレンジ」という Kobasa (1979a) の想定するハーディネスの構成要素と一致するものであった。なお、3 因子の全分散に占める割合は 45.32% であった。

第 1 因子は、因子負荷量が『Q9: 努力は必ず報

われると思う』『Q1:一生懸命やれば目標に到達できると思う』『Q23:活発に学業や仕事をしている自分はすばらしいと思う』などの項目で特に高かった。これらの項目は、自分に対して肯定的であったり、人生に対して積極的に充実感を感じていたりすることを示す特徴があるといえる。また『Q20:活発に仕事や学業をしている自分に満足している。』『Q35:問題があればそれを解決しようと努力できる。』『Q24:失敗してもそれは成功につながるものだと思う。』など、自分に対する満足感や存在意義を感じる、自分の人生の問題に関してすんで関わっていかうとするという特徴が見られた。第1因子を構成する項目がこのような特徴を示しており、自分に対する高い肯定感や、積極性があり、満足感や充実感を持っているという性質から、この因子の名前を「コミットメント」と命名した。

次に第2因子を構成する項目は『Q7:これから起こることがわからないほうがわくわくする』『Q22:今後の展開が分からないほうがおもしろいと思う』『危険をとまなう挑戦もやってみようと思う』などであった。Kobasa (1979b) の50項目版ハーディネス尺度では、コミットメント、コントロール、チャレンジの反対概念はそれぞれ、疎外・無気力・保障であるという二分法を暗黙のうちに採用していたこと(小坂, 1992)で、チャレンジ因子が健康を予測しえない(Hull *et al.*, 1987)と指摘がなされている。要するに、好奇心をもって刺激を求める人が、必ずしも保障を求めない人であるというわけではないということである。本研究の尺度について、第2因子を構成するこれらの項目は、どうなるかわからない未来を楽しみ、日常生活に好奇心を持ち刺激を求めて何事にも挑戦していく姿勢があるという特徴を示しているといえるであろう。これらの尺度は保障の低さを示すものではなかったことから、この因子の名をチャレンジとするのが妥当であると思われた。

また第3因子は5項目から構成されており、

『Q33:思いがけないことが起こったときにも臨機応変に対応できる』『Q28:予想外の出来事が起こったときにも冷静に対処できる』『Q12:予期していなかった変化に対しても柔軟な対応が出来る』などで、予期せぬ変化を恐れず、変化に対して柔軟に対応することが出来ると感じるという特徴があった。このことからこの因子をコントロールと命名した。

以上のように、Kobasa (1979a) のハーディネスの概念に基づき、日本語版PVS(小坂ら, 1992)やその他作成されたハーディネス尺度を参考にしうえて作成した項目で測定した結果は、Kobasa (1979a) のハーディネス概念、また、日本語版PVS(小坂ら, 1992)におけるハーディネス概念、下位概念であるコミットメント、チャレンジ、コントロールの3因子の特性や内容にかなりの程度合致するものであった。これら分析の結果にもとづき、3因子27項目からなる青年期用ハーディネス尺度(Personality Hardiness Inventory for Adolescence: PHIA-27)が構成された。PHIA-27の得点分布を図1に示す。

## 2. 信頼性と妥当性の検討

特定された27項目の信頼性を確認するためCronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、コミットメントでは.87、チャレンジでは.88、コントロールでは.89、尺度全体でも.91と、きわめて高い内部一貫性が確認された。また、並行検査との関係は、いずれの下位尺度、尺度全体でも有意な相関が認められ(表2)、一定の基準連関妥当性が確認された。

表 1 青年期用ハーディネス尺度 (Personality Hardiness Inventory for Adolescence: PHIA-27) の質問項目と因子負荷量

	因子負荷量		
	1	2	3
コミットメント ( $\alpha = .87$ )			
Q 9: 努力は必ず報われると思う。	.78	-.13	-.13
Q 6: 努力すれば結果は必ずついてくると思う。	.74	-.10	
Q 1: 一生懸命やれば目標に到達できると思う。	.69		-.12
Q23: 活発に学業や仕事をしている自分はすばらしいと思う。	.60		
Q17: 仕事や学業をする自分に対して、充実感を感じる。	.60		
Q53: 物事は決して思い通りにはならないので頑張っても無駄だと思う。(R)	.56		
Q20: 活発に仕事や学業をしている自分に満足している。	.55		.18
Q35: 問題があればそれを解決しようと努力できる。	.53		.17
Q24: 失敗してもそれは成功につながるものだと思う。	.52	.17	
Q26: 新しい自分を発見することに対してうれしいと感じる。	.49	.19	
Q59: 人生の大半は無意味なことに費やしていると思う。(R)	.48		
Q42: 自分の人生や生活に積極的に取り組んでいる。	.48		.20
Q48: 日常生活のほとんどは退屈だと思う。(R)	.47	-.13	
Q34: 自分の仕事や学業の内容を楽しんでいる。	.44		.13
チャレンジ ( $\alpha = .88$ )			
Q 7: これから起こることが分からない方がワクワクする。		.86	-.12
Q25: 今後の展開が分からない方がワクワクする。		.85	
Q22: これからの展開がどうなるのか分からない方が面白いと思う。		.85	
Q 4: はっきりしないことや予測できない方が人生は面白いと思う。		.69	
Q47: 危険をともなう挑戦もやってみようと思う。		.62	
Q41: 多少の危険をおかすことは楽しいことだと感じる。		.60	
Q16: 先の見通しが立たなくても何とかできるさと思う。		.53	.18
Q19: 今後の展開が分からなくても何とかできると思う。	.11	.44	.24
コントロール ( $\alpha = .89$ )			
Q33: 思いがけないことが起こった時にも臨機応変に対応できる。			.91
Q15: 急な変化にもすばやく対応できる。			.89
Q28: 予想外の出来事が起こった時にも慌てず冷静に対処できる。			.84
Q12: 予想していなかった変化に対しても柔軟な対応ができる。			.80
Q 3: 自分の意見をはっきり主張することができる。	.14		.47
Cronbach' $\alpha$			.91
寄与率 (%)	28.39	10.27	6.65
累積寄与率 (%)		38.67	45.32

(R) は反転項目

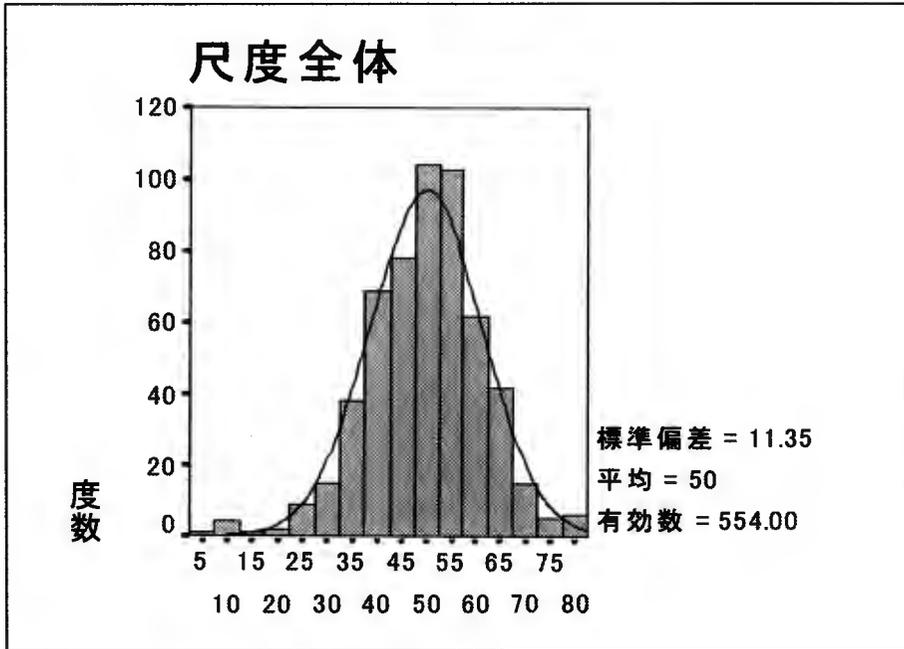


図1 PHIA-27の得点分布

表2 ハーディネス尺度と自尊感情尺度の相関(r)

	自尊感情尺度
ハーディネス尺度全体	.52**
コミットメント	.45**
チャレンジ	.34**
コントロール	.48**

\*\*...p<.01

### 3. PHIA 簡易版の試作

次に、より簡便に個人のハーディネス傾向を把握するため、PHIA 簡易版の作成を意図した。

本研究で作成した PHIA-27 の各因子より、負荷量の高かった上位 5 項目ずつを採用し、15 項目で確認的因子分析を行ったところ、27 項目版と一致した因子構造が見られ (表 3)、累積寄与率は 57.40%であった。

また、PHIA 簡易版信頼性を検討するために  $\alpha$  係

数を算出したところ、尺度全体での  $\alpha$  係数が .86 であった。このことから簡易版ハーディネス尺度においても、原尺度と同様の測定内容を維持していると考えられた。そこで、原尺度の約半分の負担で実施可能な本簡易版を、PHIA-15 とすることとした。

表 3 PHIA-15 の因子負荷量

	因子		
	1	2	3
Q33: 思いがけないことが起こった時にも臨機応変に対応できる。	0.89		
Q15: 急な変化にもすばやく対応できる。	0.89		
Q28: 予想外の出来事が起こった時にも慌てず冷静に対処できる。	0.84		
Q12: 予期していなかった変化に対しても柔軟な対応ができる。	0.80		
Q3: 自分の意見をはっきり主張することができる。	0.47		
Q25: 今後の展開が分からない方がわくわくする。		0.86	
Q22: これからの展開がどうなるのかわからない方が面白いと思う。		0.85	
Q7: これから起こることが分からない方がわくわくする。		0.84	
Q4: はっきりしないことや予測できない方が人生は面白いと思う。		0.70	
Q47: 危険をとまなう挑戦もやってみようと思う。		0.50	
Q6: 努力すれば結果は必ずついてくと思う。			0.85
Q9: 努力は必ず報われると思う。			0.84
Q1: 一生懸命やれば目標に到達できると思う。			0.74
Q17: 仕事や学業をする自分に対して、充実感を感じる。		0.15	0.45
Q23: 活発に学業や仕事をしている自分はすばらしいと思う。	0.15		0.45

**【考 察】**

本研究の目的は、青年を対象に青年期用ハーディネス尺度の作成を行うことであった。その結果 3 因子 27 項目からなる青年期用ハーディネス尺度 (Personality Hardiness Inventory for Adolescence: PHIA-27) が構成され、一定程度の信頼性と妥当性が確認された。さらに本尺度の簡易化を試みたところ、同様の因子構造を有する PHIA-15 を確認することができた。PHIA-27, 同 15 とともに、抽出された 3 因子は、いずれも従来のハーディネス概念に対応したコミットメント、チャレンジ、コントロールの要素を包含していた。従来のハーディネス尺度の邦訳版では、因子構造が不安定であったり (河嶋ら, 2001), 因子「チャレ

ンジ」における内部一貫性の低さが問題となっていたが、本研究の結果では安定した因子構造といずれの因子でも高い内部一貫性が確認された。また、本研究では 15 項目簡易版のハーディネス尺度の試作を行った。その結果、27 項目版と同様の因子構造が見られ、項目の内容を検討した結果から、第 1 因子がコミットメント、第 2 因子がチャレンジ、第 3 因子がコントロールの特徴を示していると考えられた (PHIA-15)。また基礎統計量、尺度と各因子間の相関関係から 15 項目版ハーディネス尺度においても信頼性と妥当性が確認された。

ハーディネスという特性は、前述のように、実存主義的な立場に立脚している。このことは、人生が決定の連続であり、人間は自分の置かれた環

境に深く関与しながら、そこから求められるものに応じて活動する者が、個としての成長や利益を得る可能性やチャンスに転ずることができるという前提に立っていることを示している。本研究においては、作成されたハーディネス尺度と平行して実施されたのはローゼンバークの自尊感情尺度であった。遠藤ら (1992) は、自尊感情が高いことは自分自身を『これでよい』と考えることを意味するとし、自分が自分自身を尊敬し価値ある人間であると考えている程度のことであるとしている。このことは、他者との比較において相対的に「よい」と捉えているのではなく、悪いと考えているわけでもない。自分が完全体であると考えているのではなく、むしろ成長や改善の期待と限界を知っていることを意味している。すなわち、自尊感情の高さは自分自身を尊敬し価値があると感じ、自分自身に対して肯定的であることを示し、自己実現に際して当然通過すべき環境との相互作用に対する肯定感の高さを表すことになる。

このように考えると、パーソナリティにおけるハーディネスの程度と自尊感情には共通部分が存在していると考えられる。事実、PHIA-27 と自尊感情尺度得点の相関は、PHIA-27 全体得点と自尊感情尺度得点でやや強い相関が、PHIA-27 の各因子得点とでいずれも中程度の相関が見られた。因子の性格上、自尊感情尺度と特に相関が高いと予測されるのは、自分に対して肯定的であり人生に対して積極的に充実感を感じているという特徴があるコミットメントであるが、実際にはコミットメントとコントロールは同程度の相関を示していた。環境変化に対して柔軟に対応する力には、環境において生じる種々に事態に対する統制可能感が背景として存在しているのかもしれない。一方、チャレンジ因子と自尊感情尺度の相関係数は有意ではあるが、ほかの2つの因子よりはやや低かった。コミットメントとコントロールが、環境との相互関係において観察される、いわば安定した自己像の程度と関係しているのに対し、毎日の生活

において安定性よりも変化が人生の標準である考える特性をもつチャレンジとでは、パーソナリティの静的側面と動的側面のような関係としての異質さがあると考えられる。しかしながら、ハーディネスと自尊感情のもっとも顕著な相違はこの点であるともいえるだろう。すなわち、ハーディネスには、環境への「柔軟」な関与を超えたより「積極的」な働きかけを行おうとする個人の志向性が「チャレンジ」として反映されている。個人のそのような積極性は、ストレスへの対処にあたり、問題の効率的処理を目的とする課題焦点型対処を誘導し、ストレス反応の減弱に寄与するのみならず自己成長感を誘導するのではないかと考えられる。

さて、日本語版 PVS (小坂ら, 1992) を、大学生を対象に実施した研究 (河嶋ら, 2001) では因子分析の結果、先行研究で述べられているように従来の3因子で解釈しようとした場合、PVS における Q59 がコミットメント、Q53 はコントロール、Q23 はチャレンジを構成する項目とならしている。しかし、各因子ともにそれぞれの項目の因子負荷量にばらつきがあり実際には3因子での解釈が困難であったため、日本語版 PVS は20項目2因子構造に再構成された (日本語版20項目ハーディネス尺度: HS-20)。この中では、特にコミットメントとコントロールが相互に重複した概念である可能性が示唆されており、第1因子はポジティブ思考、第2因子はコントロール可能感と命名され、Q53 はコントロール可能感、Q48 と Q59 はポジティブ思考を構成する項目と判断されていた。一方、小坂ら (1992) は、日本語版 PVS の因子分析の結果から、コミットメント、コントロール、チャレンジの各特性は、3因子の中の、特定のある因子の特性を反映しているというわけではなく、3つの因子にわたって影響を及ぼしているがその程度には差があるとの見解を示しており、因子構造とハーディネスの構成要素の関係についてはさらなる検討が必要なのかも知れない。

今後は、今回作成された尺度についても実際の臨床的妥当性あるいはストレス関連性疾患との関係について、データの蓄積が望まれる。

【参考文献】

- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千尋 1992 「セルフエスティーム研究の視座—自己価値の探求」ナカニシヤ出版。
- Kobasa, S. C. 1979a Stressful life events, personality, and health : An inquiry into hardiness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37 , 1-11.
- Kobasa, S. C. 1979b Personality and resistance to illness. *American Journal of Community Psychology* , 7 , 413-423.
- 河嶋美穂・東條光彦・松岡洋一・田中宏二 2001 ハーディネス・パーソナリティ尺度の作成に関する研究 岡山大学教育学部研究収録, 116, 25-31.
- 小坂守孝 1992 ストレス抵抗資源としての実存的性格特性：ハーディネス尺度に関する文献研究 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要, 35, 29-36.
- 小坂守孝・吉田 悟 1992 ハーディネス, ストレッサーと心理的健康との関係性：管理職者を対象にした調査研究 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要, 34, 43-50.
- 桜井茂男 1995 高校生におけるハーディネスとストレスの関係 日本教育心理学会第 37 回総会発表論文集 85.
- 多田志麻子・濱野恵一 2003 ハーディネス尺度の信頼性と妥当性の検討 ノートルダム清心女子大学紀要生活経営学・児童学・食品栄養学, 27, 56~62.
- 多田志麻子・石原金由・濱野恵一 2001 大学生用ハーディネス尺度作成の試み ノートルダム清心女子大学児童臨床年報, 14, 45-52.
- 田中秀明・外山美樹・桜井茂男 1998 大学生用ハーディネス尺度の妥当性の検討 発達臨床心理学研究, 9, 59-66.